トルコ系移民の言語意識とアイデンティティ
ドイツ 18 都市におけるアンケート調査に基づいて

田中　翔太

1.　はじめに

1.1　研究の背景

ドイツには現在、移民背景を持つ人が数多く暮らしている。そのなかで最も多いのが、トルコの移民背景を持つ人たちである。トルコ国籍所有者はドイツに 150 万人弱おり、そこにドイツ国籍を取得したトルコの移民背景を持つ者を加えると、合計して約 280 万人のトルコ系移民[1]がドイツに暮らしていることになる（Statistisches Bundesamt 2017b: 39、Statistisches Bundesamt 2017c: 63 を参照）。

第二次世界大戦後に高度成長期を迎えたドイツ連邦共和国（以後、1990 年までを「旧西ドイツ」と呼ぶ）は、1961 年にトルコと労働協定を結び、それ以降に多くの外国人労働者たち、すなわちガストアルバイターと呼ばれた人たちが旧西ドイツへと渡った。外国人労働者の多くは当初、単身で来独したが、後に労働の契約などを理由にドイツへ定住し、トルコへ残した妻子を呼び寄せることになる。さらに 1970 年代になると、クルド紛争などの政治的理由から、トルコからの亡命者がドイツへと渡ってきた。現在ドイツに定住しているトルコ系移民は、第三世代、第四世代にまで及んでいる。

トルコ系移民の教育水準は、ドイツ社会から問題視されてきた[2]。ドイツ語運用能力に関しても、第一世代の頃は、トルコ系移民が話すドイツ語はドイツ社会か

1)　以下本論文で「トルコ系移民」と記すときは、トルコ国籍所有者と、ドイツ国籍を取得したトルコの移民背景を持つ者両方を指すこととする。本論文の第 2 章から扱うアンケート調査も、この両方を対象としている。第二世代以降で自らは移住経験がない人物、すなわちドイツ国内で生まれたトルコの移民背景を持つ人物が存在するが、名称の区別による誤解を避けるために、このような人物についても便宜的に「トルコ系移民」という名称で統一した上で、「第一世代」、「第二世代」、「第三世代」と称していく。

2)　PISA ショックやトルコ系移民の就学率・就職率に代表される。詳しくは、田中（2015: 164f.）を参照。

ら、「ブロークンなドイツ語」（Androutsopoulos 2001: 330）と見なされることが多くあった。しかし第二世代、第三世代に至るにつれて、トルコ系移民は近年、徐々に教育水準を上げつつある[3)]。

1.2　トルコ系移民対象のアンケート調査による先行研究

トルコ系移民を対象とする研究には、教育に関する現状や、彼らが話すドイツ語の特徴を扱ったものが多い。しかし、トルコ系移民を対象としたアンケート調査、なかでもトルコ系移民の言語意識とアイデンティティの両方に関する調査は少ない。例えば Polat（1998）は、ハンブルクに住むトルコ系移民の第二世代を対象に、アンケート調査を行っている。Polat は社会学の観点から、主にトルコ系移民のアイデンティティについて調査を行っている。Polat はハンブルクに暮らすトルコ系移民について、次のように結論づけている。「[…] トルコ人としてのアイデンティティを持っているアンケートの回答者は、大半が低い卒業資格を有しており、社会的に低いステータスの仕事に従事している。すなわち、トルコ人としてのアイデンティティを持つ回答者は、ドイツにおけるトルコ系移民のグループ内でも、下層の位置にいる」（Polat 1998:154）。彼らの教育水準に関しても、「多くが、学歴を基幹学校（Hauptschule）で終えている」（同 : 149）[4)]。

続いて林（2001、2003、2008a、2008b、2018）は、ベルリンのクロイツベルク地区に生活するトルコ系移民の第三世代を対象に行ったアンケート調査の結果を分析している。林は 2000 年に、統合学校（Gesamtschule）に通うトルコ系移民の生徒を対象に、トルコ系移民の言語使用について調査を行った。林は、ベルリン

3)　過去 6 年間（2011/2012 年から 2016/2017 年まで）における初等教育終了後の基幹学校（Hauptschule）、実科学校（Realschule）、ギムナジウム（Gymnasium）への進学率を見ると、その変動が分かる。この 6 年のあいだに、基幹学校へ通うトルコ籍の生徒の比率は 15% 減少する一方で、ギムナジウムへ通うトルコ籍の生徒の比率は 15% 増加している（Statistisches Bundesamt 2012, 2013, 2014, 2015, 2016, 2017a を参照）。

4)　ここで言及しておきたいのが、Polat（1998）による調査が行われたのが、ドイツ国内で二重国籍が正式に認められる前の時点であるということである。ドイツ国内で生まれた外国人の子どもには、23 歳までに一つの国籍を選ぶ「選択義務」があったが、2014 年に同ルールが緩和された。それゆえ、本論文の第 2 章以下で紹介する筆者自身が 2018 年に行ったアンケート調査時とは、トルコ系移民が置かれている国籍に関する状況が異なっている。実際、筆者がアンケート上で回答者の国籍を尋ねたところ、本アンケート調査ではドイツ国籍のみを所有する者が 52 名、トルコ国籍のみを所有する者が 53 名、そしてドイツとトルコの二重国籍所有者が 23 名いた。

の統合学校の生徒について、「トルコとのつながりが弱い話し手のほうが、むしろトルコ語に対する強いこだわりを持つ可能性が観察された [⋯]。これは、ドイツ社会への順応が進みトルコとのつながりが薄れることが、かえってトルコ語への関心を喚起することになると解釈することができるだろう」（林 2003: 41）と結んでいる。

1.3　研究の目的

本論文の目的は、上に紹介した先行研究に鑑み、トルコ系移民のアイデンティティが 2018 年現在どのようになっているかをアンケート分析によって調査することである。二つの先行研究に共通しているのは、どちらもアンケート調査の実施都市をハンブルク、ベルリンと限定し、対象とする世代をそれぞれ第二世代、第三世代と、ひとつの世代に絞っている点である。それに対して筆者の調査は、複数の世代を対象に複数の都市でアンケートを行った点で、これらの先行研究とは異なっている。また本調査は先行研究と比較して、トルコ系移民の言語意識とアイデンティティの両方に関する質問をアンケート上で均等に、なおかつより詳細に設けている。

分析にあたり、言語とアイデンティティに密接な繋がりがあると想定される。そのためまずは、アンケート回答者が話すときと書くときのドイツ語運用能力をどのように自己評価しているのか、そしてアンケート回答者は、家族と何語で話しているのかを分析する。それを踏まえて、回答者の言語意識とアイデンティティの関係を探っていく。

2.　アンケート実施の要領

本論文で扱うアンケート調査に関する要項は、表 1 にあるとおりである。

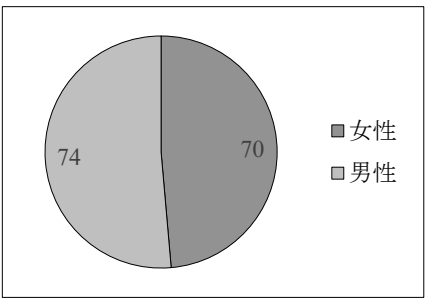
アンケートは 2017 年 12 月 1 日から 2018 年 3 月 30 日までの 4 カ月のあいだに実施した。アンケートの実施にあたり、ドイツ全国にあるトルコ系移民に関係のある団体や施設、モスクなどに声を掛け、許可が下りた 18 の都市の施設でアンケートを実施した。アンケートの対象はすでに注 1 で触れたように、トルコ国籍所有者だけでなく、ドイツ国籍を取得したトルコの移民背景を持つ者も含めたト

表 1: アンケート実施要項

1）期間	2017 年 12 月 1 日－ 2018 年 3 月 30 日
2）都市	ドイツ 18 都市 Aachen, Augsburg, Berlin, Bielefeld, Bremen, Dortmund, Duisburg, Essen, Frankfurt am Main, Göttingen, Hamburg, Köln, Mannheim, München, Nürnberg, Recklinghausen, Stuttgart, Wiesbaden
3）対象者	- トルコ系移民、第一世代から第四世代の男女 : 144 名 （うち有効回答数 : 135 名） - アンケート回答者全 144 名の内訳 : - 女性 : 70 名 / 男性 : 74 名 - 第一世代 : 19 名 / 第二世代 : 57 名 / 第三世代 : 52 名 / 第四世代 : 7 名 / 世代不明者 : 9 名

ルコ系移民である。回答者は第一世代から第四世代の男女計 144 名 [5] で、性別の内訳は、女性が 70 名で男性が 74 名である（グラフ 1 を参照）。世代の内訳は第一世代が 19 名、続く第二世代が 57 名、第三世代が 52 名、第四世代が 7 名である。本論文で世代間の比較をするにあたり、第四世代の回答者数が少ないため、第四世代は第三世代と合わせて、「第三世代以降」として説明していく。また、世代不明者が 9 名いたため、144 名から 9 名を引いた 135 名分のデータを有効回答と

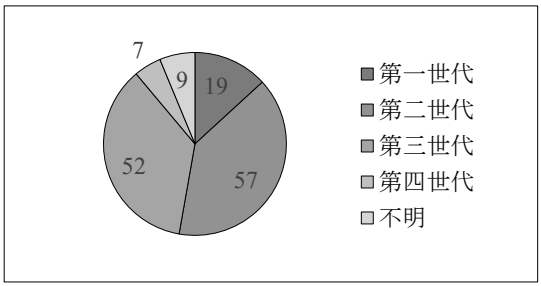
グラフ 1: アンケート回答者の性別



5)　本調査を実施するにあたり、ドイツ全国のトルコに関連する計 500 以上の団体、「青少年センター」(Jugendzentrum)、「学生団体」(Studentenverband)、「婦人会」(Frauenverein)、「多世代の家」(Mehrgenerationshaus)、「ドイツ・トルコ友の会」(Deutsch-Türkischer Freundschaftsverein)、大学、企業、スポーツ団体などにアンケート実施の依頼を送った。そのなかから許可の下りた団体すべてでアンケートを実施した結果、回答者数が 144 名となった。アンケート調査の際に留意すべきは、回答者の選出法である。ドイツに生活するトルコ系移民全体から代表的な回答者を選ぶため、回答者の社会的背景に偏りが出ないよう留意した。

して扱うこととする（グラフ 2 を参照）。

グラフ 2: アンケート回答者の世代



アンケート用紙はドイツ語とトルコ語の二言語[6]で用意をし、回答者が回答する言語を選択できるようにした。アンケート用紙は全 10 ページで構成されており、言語運用能力の自己評価、言語使用の状況、アイデンティティについての質問等[7]を、計 139 個設けている。なおアンケートの質問事項のうち、本論文で扱う質問に関しては、第 3 章以降の分析結果の際に、実際の質問と並べて結果を紹介していく。

3. 言語運用能力および言語使用に関する自己評価

3.1 ドイツ語運用能力に関する自己評価

まずアンケートの回答者が、話すときおよび書くときのドイツ語運用能力に対して、どのような自己評価を与えているかについて観察したところ、回答者のドイツ語運用能力に対する自己評価に、世代間で差が見られた。その点を、次の節から詳述していきたい。

6) アンケート回答者のうち、ドイツ語のアンケート用紙を選択した者は 98 名、トルコ語のアンケート用紙を選択した者は 37 名であった。世代別に見ると、第一世代でドイツ語の用紙を選択した者は 4 名、トルコ語の用紙を選択した者が 15 名、第二世代でドイツ語の用紙を選択した者は 46 名、トルコ語の用紙を選択した者が 11 名、第三世代以降でドイツ語の用紙を選択した者は 48 名、トルコ語の用紙を選択した者が 11 名いた。

7) トルコ系移民は、ドイツ語、またはトルコ語母語話者のみで構成されているわけではない。両言語以外にも、例えばクルド語やザザキ語などを母語とするトルコ系移民も存在する。本アンケート調査を実施する際にもその点に留意し、回答者にとってどの言語が母語であるのかを質問している。結果としてクルド語が母語話者と回答した者が 2 名いたが、彼らは世代が不明の 7 名のなかに含まれていたため、本論文では分析対象に含めていない。

3.1.1 話すときのドイツ語運用能力に関する自己評価

話すときのドイツ語運用能力の自己評価について、アンケート上で、„Wie gut würden Sie sagen, sprechen Sie Deutsch?“（あなたは、どのぐらい上手にドイツ語を話すと思っていますか？）という問いを設けた。アンケート回答者は、„sehr gut“（とても上手い）、„gut“（上手い）、„mäßig“（並み）、„schlecht“（下手）、„gar nicht“（全く話さない）の 5 択から、最も自らの状況に当てはまる回答を選択することが可能であった。

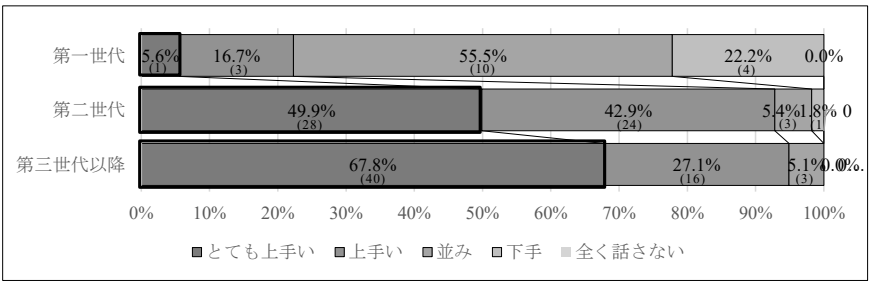
1) Wie gut würden Sie sagen, sprechen Sie Deutsch?

（あなたは、どのぐらい上手にドイツ語を話すと思っていますか？）

sehr gut	gut	mäßig	schlecht	gar nicht
（とても上手い）	（上手い）	（並み）	（下手）	（全く話さない）
☐ 1	☐ 2	☐ 3	☐ 4	☐ 5

回答をグラフにあらわしたところ、次のような結果となった。

グラフ 3: ドイツ語運用能力の自己評価（話すとき）（カッコ内は実数）



グラフの軸は、上から第一世代、第二世代、第三世代以降の結果を表している。自己評価については、左から、話すときのドイツ語運用能力をそれぞれ「とても上手い」、「上手い」、「並み」、「下手」と答えた回答者の割合である。最も低い自己評価である「全く話さない」を選択した回答者はいなかったため、比較対象に加えていない。なお、グラフのパーセンテージの下に小さくカッコ書きで書いてある数字は、回答者の実数である。グラフの見方は、以下すべて同様である。

ここでは、左端の「とても上手い」と、右端の「下手」と回答した人、両極の割合の違いに着目したい。第一世代では自らの話す際のドイツ語運用能力を「とても上手い」と評価する人が 5.6%であったが、第二世代ではほとんど 50%にまで増加している。第三世代以降になると、「とても上手い」と自己評価した人の割合は、さらに 68%近くまで微増している。それに反比例して、話すときのドイツ語運用能力を「下手」と自己評価した人の割合が第一世代では 22%強いたのに対し、第二世代では 2%弱にまで減少し、第三世代以降では、自らの話すときのドイツ語運用能力を「下手」と自己評価した人はいなかった[8)]。

3.1.2 書くときのドイツ語運用能力に関する自己評価

続いて、書くときのドイツ語運用能力に関する自己評価を見ていきたい。話すときの自己評価と同様に、アンケートには „Wie gut würden Sie sagen, schreiben Sie Deutsch?“（あなたはどのぐらい上手にドイツ語を書くと思っていますか？）という問いを設け、回答者は „sehr gut“（とても上手い）、„gut“（上手い）、„mäßig“（並み）、„schlecht“（下手）、„gar nicht“（全く書かない）の 5 択から回答が可能であった。

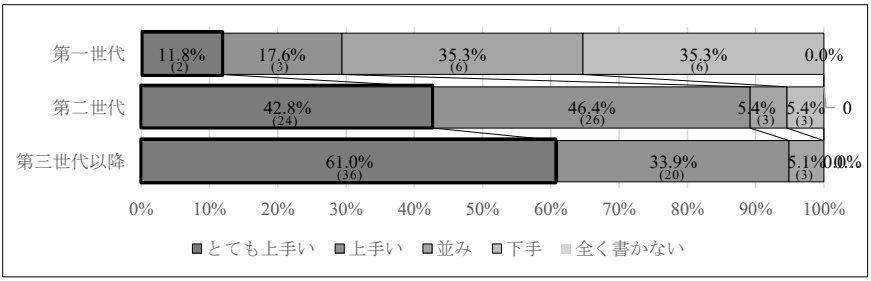
2) Wie gut würden Sie sagen, schreiben Sie Deutsch?

（あなたはどのぐらい上手にドイツ語を書くと思っていますか？）

sehr gut	gut	mäßig	schlecht	gar nicht
（とても上手い）	（上手い）	（並み）	（下手）	（全く書かない）
□ 1	□ 2	□ 3	□ 4	□ 5

8) 世代を問う質問、ドイツ語運用能力を問う質問ともに、統計学においては順序尺度に属す質問である。統計学では、順序尺度同士の相関性を観察する場合に、スピアマンの順位相関係数を用いて計算を行う。p 値が 0.05 以上の場合は有意差なしとなり、0.05 以下の場合に有意差ありとなる。p 値に有意差があった上で、ρ（ロー）の数値が 1.0 あるいは -1.0 に近づくほど、変数間の関係が強いことを意味している。そして ρ（ロー）が 0 のときは、2 つの変数に関係がないことを示している。話すときのドイツ語運用能力と世代を、スピアマンの順位相関係数を用いて計算したところ、まず p 値が $6.045e^{-08}$ となり、有意差があることが分かった。続いて ρ（ロー）は、0.4487611 という数値となった。このことから、第二世代、第三世代以降と世代が若くなるにつれて、ドイツ語運用能力を高く自己評価していると統計学的裏付けをもって言うことができる。

グラフ 4: ドイツ語運用能力の自己評価（書くとき）



質問 2) についても、最も低い自己評価である「全く書かない」と回答した人はいなかったため、左端の「とても上手い」と自己評価した人と、右端の「下手」と自己評価した人の両端に着目したい。第一世代では、書くときのドイツ語運用能力を「とても上手い」と自己評価する人が 12%弱であったが、第二世代で「とても上手い」と自己評価をする回答者は 42%強にまで上昇し、さらに第三世代以降では 61%が「とても上手い」と回答した。それに対して、書くときのドイツ語運用能力を「下手」と自己評価した人の割合は、第一世代でおよそ 35%いたのに対し、第二世代ではおよそ 5%に減少し、第三世代以降で書くときのドイツ語運用能力を「下手」と自己評価した人はいなかった。すなわち第二世代以降は、第一世代と比較して、自らの話すときと書くときのドイツ語運用能力をどちらも高いと意識している人が増えていることが、アンケート調査の結果から見えてきた [9)]。

3.2　家族に対する言語使用

続いて、アンケート回答者が家族と何語で話していると答えたのかを見ていく。ここでは、„Mit wem in Ihrer Familie sprechen Sie TÜRKISCH?“（あなたは家族の誰とトルコ語で話していますか？）、„Mit wem in Ihrer Familie sprechen Sie DEUTSCH?“（あなたは家族の誰とドイツ語で話していますか？）という二つの

9)　書くときのドイツ語運用能力と世代の関係についても、スピアマンの順位相関係数を用いて計算した。まず p 値は $1.901e^{-06}$ となり、統計学的な有意差が見られた。さらに ρ（ロー）は 0.4009118 となり、話すときのドイツ語運用能力と同様に、書くときのドイツ語運用能力に関しても、第二世代、第三世代以降になるにつれ、より高く自己評価していることが統計学的裏付けを持って分かった。

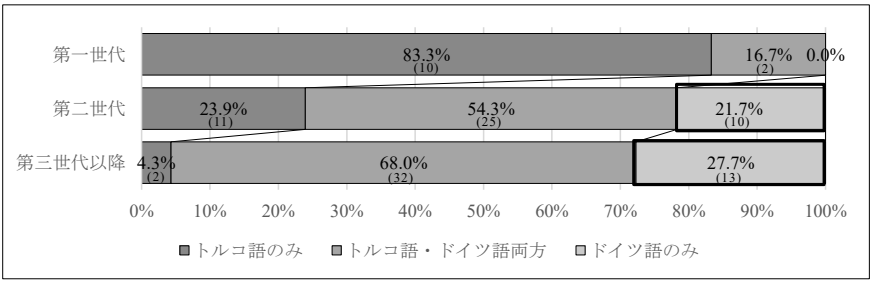
質問を設け、回答者が日常生活で家族に対して何語で話しているのかを尋ねた。回答者にはそれぞれの質問に対して、„Großeltern“（祖父母）、„Eltern“（両親）、„Geschwister“（兄弟姉妹）、„Kinder“（子ども）、„Ehepartnern/Freundin/Freund“（配偶者・恋人）、そして „Sonstige“（その他）のなかから、該当する人物すべてに印をつけてもらっている。以下、上記の話し相手により、世代間で言語使用に差が見られるかどうかを比較したい。

3) Mit wem in Ihrer Familie sprechen Sie TÜRKISCH? (Mehrfachantworten möglich)
（あなたは家族の誰とトルコ語で話していますか？（複数回答可））
☐ Großeltern（祖父母）, ☐ Eltern（両親）, ☐ Geschwister（兄弟姉妹）,
☐ Kinder（子ども）, ☐ Ehepartnern/Freundin/Freund（配偶者・恋人）,
☐ Sonstige（その他）（　　）

4) Mit wem in Ihrer Familie sprechen Sie DEUTSCH? (Mehrfachantworten möglich)
（あなたは家族の誰とドイツ語で話していますか？（複数回答可））
☐ Großeltern（祖父母）, ☐ Eltern（両親）, ☐ Geschwister（兄弟姉妹）,
☐ Kinder（子ども）, ☐ Ehepartnern/Freundin/Freund（配偶者・恋人）,
☐ Sonstige（その他）（　　）

集計の際に、アンケート回答者が例えば「あなたは家族の誰とトルコ語で話していますか？」の箇所にのみ「祖父母」と回答している際は、アンケート回答者が祖父母に対して「トルコ語のみ」を使用していると集計した。同様に、「あなたは家族の誰とドイツ語で話していますか？」の箇所にのみ「祖父母」と回答している場合は、その回答者が祖父母に対して「ドイツ語のみ」を使用しているとして、集計した。そしてトルコ語とドイツ語どちらともに「祖父母」の箇所に印をつけている場合は、回答者が祖父母に対して「トルコ語・ドイツ語両方」を使用していると計算した。話し相手が「両親」、「兄弟姉妹」、「子ども」、「配偶者・恋人」そして「その他」の人物の場合も、同様である。

グラフ 5: 兄弟姉妹に対する言語使用



まずはグラフ 5 の左端にある、兄弟姉妹に対して「トルコ語のみ」を話す人の割合と、右端の「ドイツ語のみ」を話す人の、世代間の割合の違いに着目していきたい。第一世代では、83%強が兄弟姉妹に対して「トルコ語のみ」を使用しているが、第二世代になると、「トルコ語のみ」を話す人が 24%弱にまで減少している。第三世代以降になるとその数はさらに落ち込み、兄弟姉妹と「トルコ語のみ」を話す人は、4%台にまで減少している。それに対して、兄弟姉妹に対して「ドイツ語のみ」を使用する人は、第一世代では見られなかったが、第二世代では 22%近く存在している。第三世代以降でも、28%近くが兄弟姉妹に対して「ドイツ語のみ」を使用している。つまり同グラフから、第一世代、第二世代、第三世代以降と世代が移るにつれて、兄弟姉妹に対してドイツ語を使用する人の割合が高くなっていることが分かる [10)]。

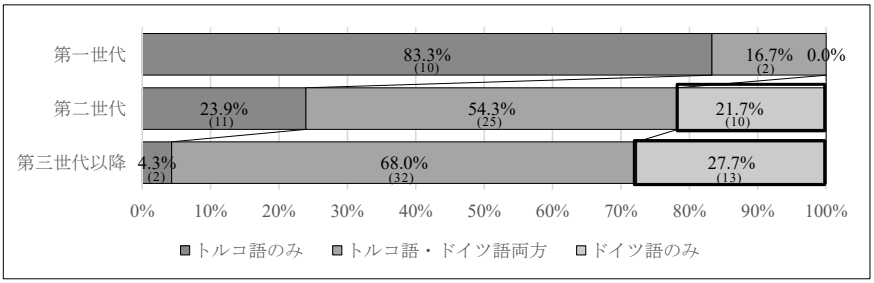
また次のグラフ 6、グラフ 7、グラフ 8 に示したように、話し相手が「祖父母」、「両親」、「子ども」のときも [11)]、「兄弟姉妹」のときと同様に、世代が移るにつれて、ドイツ語を使用する割合が高くなるという結果が得られた [12)]。

10) スピアマンの順位相関係数を用いて計算したところ、p 値は $1.644e^{-06}$ となり、統計学的な有意差が見られた。さらに ρ（ロー）は -0.3989575 となり、世代を経るごとに、兄弟姉妹に対するドイツ語の使用が増加していることが統計学的裏付けを持って分かった。以下、話し相手が「祖父母」、「両親」、「子ども」の場合も結果は同様である。

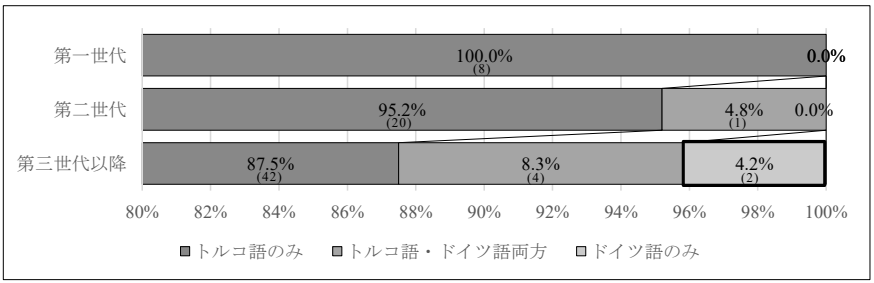
11) 話し相手が「配偶者・恋人」の項目については、アンケート内で相手の移民背景の有無、国籍などを尋ねなかったため、ここでは比較対象から省いた。今後実施予定のトルコ系移民を対象としたインタビュー調査で、その点を含めてさらに調査していく。

12) 祖父母が話し相手の際は、p 値が $7.289e^{-07}$ となり、有意差が確認された。そして ρ（ロー）が -0.411146 となり、第二世代、第三世代以降と、祖父母に対してドイツ語を使用する割合が高くなっていることが統計学的裏付けを持って分かった。話し相手が両親の場合も、p 値が $2.227e^{-12}$ となり、まず有意差が確認された。ρ（ロー）は -0.5572471 となり、祖父母が話し相手の際と同様に、第二世代、第三世代以降となるにつれ、回

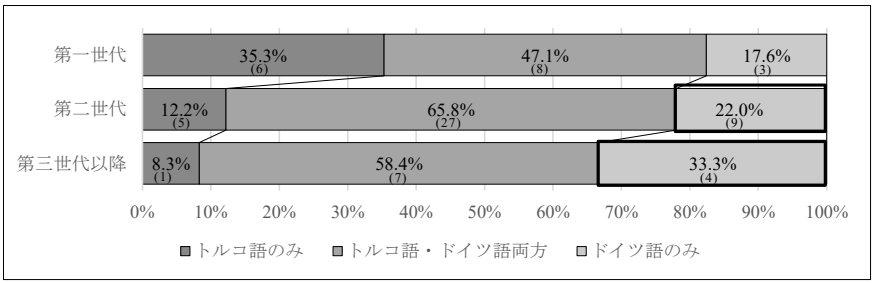
グラフ 6: 祖父母 [13] に対する言語使用



グラフ 7: 両親に対する言語使用



グラフ 8: 子どもに対する言語使用



答者が両親に対してよりドイツ語を使用していることが明らかとなった。同様に話し相手が子どもの場合も、まず p 値が $4.149e^{-09}$ となり、有意差が確認された。そして ρ（ローー）は 0.479089 となり、やはり第二世代、第三世代以降と世代が移るにつれて、子どもに対してドイツ語を使用している回答者の割合が増えることが、統計的裏付けを持って明らかとなった。

13) 話し相手が祖父母の場合、第一世代の祖父母がドイツで生活していないはずなので、第一世代でその祖父母とドイツ語で話さないのは当然と言える。また、第二世代の祖父母の場合も、ドイツで生活していない可能性が高いので、トルコ語のみを選択する回答者が 9 割を占めているのは、当然の結果と言える。

なお、家族に対する言語使用をあらわしたグラフ内（グラフ 5 ～ 8）にある「トルコ語・ドイツ語両方」という項目は、アンケート回答者が同一の人物と話す際に、トルコ語とドイツ語の両方を使用しているということを示している。これは、例えば母親が話し相手の場合に、トルコ語とドイツ語をスイッチングしているということを意味している。

この章の結果を総括すると、トルコ系移民の第二世代以降は、自らのドイツ語運用能力が高くなっていると意識し、また家族に対してドイツ語をより使用するようになっていると意識していることが分かった。しかし、ここで一つの疑問が浮かぶ。第二世代以降は、ドイツ語を多く使うようになったことで、トルコ人としてのアイデンティティを大きく失ってきているのであろうか。

4.　トルコ系移民のアイデンティティ

そこで、第 3 章で見てきたドイツ語運用能力に関する自己評価および家族に対する言語使用に関する結果を踏まえ、本章では、アンケート結果に基づきながら、トルコ系移民のアイデンティティについて観察していきたい。

4.1　アンケート回答者のアイデンティティ

4.1.1 ドイツ人としてのアイデンティティ

トルコ系移民の第二世代以降は、自らをよりドイツに近い、すなわちドイツへの親和性が高いと感じているのかどうかを測るために、アンケートでは、以下の 6 つの質問を設けた。

5) Ich denke, ich bin ein typischer Deutscher/eine typische Deutsche.
（自分は典型的なドイツ人だと思う。）

6) Ich bin stolz darauf, ein Deutscher/eine Deutsche zu sein.
（ドイツ人であることを誇りに思う。）

7) Ich fühle mich in Deutschland eher als Deutsche.
（ドイツではどちらかというと、ドイツ人だと感じる。）

8) Ich halte meine Verbundenheit mit Deutschland für hoch.
（ドイツとの結びつきは強い。）

9) Für mich ist es wichtig, als deutsch gesehen zu werden.

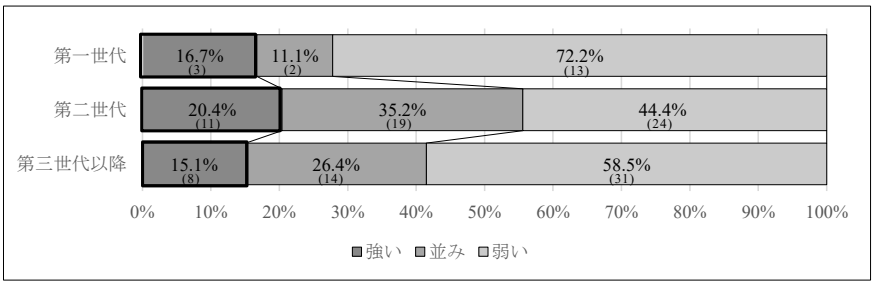
（ドイツ人として見られることは、重要である。）

10) Deutschland ist für mich meine Heimat.

（ドイツは自分にとって、故郷である。）

それぞれの問いに対してアンケート回答者は、„stimme voll und ganz zu“（非常に同意できる）、„stimme eher zu“（どちらかというと同意できる）、„teils-teils“（どちらともいえない）、„stimme eher nicht zu“（どちらかというと同意できない）、„stimme gar nicht zu“（全く同意できない）、の 5 択から、最も自らの考えに当てはまる項目を選択する。分析の際に、各質問で「非常に同意できる」と「どちらかというと同意できる」を 1 ポイント、「どちらともいえない」を 0 ポイント、「どちらかというと同意できない」と「全く同意できない」を -1 ポイントと換算した。各回答者の質問 5) から 10) までの回答を平均して、プラスの値で 0.5 以上の場合は「ドイツ人としてのアイデンティティ」を「強い」と換算し、0.5 を下回り 0 までの場合は「ドイツ人としてのアイデンティティ」を「並み」として換算、マイナスの値の場合は「ドイツ人としてのアイデンティティ」を「弱い」として換算した。「ドイツ人としてのアイデンティティ」が「強い」、「並み」、「弱い」の 3 段階で算出をしたところ、次のような結果となった。

グラフ 9: 世代別に見た「ドイツ人としてのアイデンティティ」の強さ



グラフ 9 では、「ドイツ人としてのアイデンティティ」の強さを、世代別に示している。上の軸から、第一世代、第二世代、第三世代以降の結果を表しており、左から、「ドイツ人としてのアイデンティティ」がそれぞれ「強い」、「並み」、「弱

い」と感じている人の割合となっている。ここでは、左端の「ドイツ人としてのアイデンティティ」が強いと感じている回答者における世代別の割合の違いに着目したい。第一世代は 17%弱が「ドイツ人としてのアイデンティティ」が強いグループに属しており、第二世代では、およそ 20%が「ドイツ人としてのアイデンティティ」を強いグループに含まれている。しかし第三世代以降になると、「ドイツ人としてのアイデンティティ」が強いと感じているグループは微減し、15%程度にとどまっている。

第二世代と第三世代以降は自らのドイツ語運用能力を高く評価し、家族に対してドイツ語を使用することが多くなってきていることが第 3 章ではたしかに明らかとなった。しかしながら、アイデンティティの観点で見てみると、「ドイツ人としてのアイデンティティ」が強いと感じているグループは、全世代を通して 20%弱にとどまっている点は注目に値する。

4.1.2 トルコ人としてのアイデンティティ

続いて、アンケート回答者の「トルコ人としてのアイデンティティ」について見ていこう。「トルコ人としてのアイデンティティ」を測るために、先ほどと同様に、アンケートではアイデンティティに関する質問を 6 個設けた。

11) Ich denke, ich bin ein typischer Türke/eine typische Türkin.
（自分は典型的なトルコ人だと思う。）

12) Ich bin stolz auf meine türkischen Wurzeln.
（トルコのルーツを誇りに思う。）

13) Ich fühle mich in Deutschland eher als Türke.
（ドイツではどちらかというと、トルコ人だと感じる。）

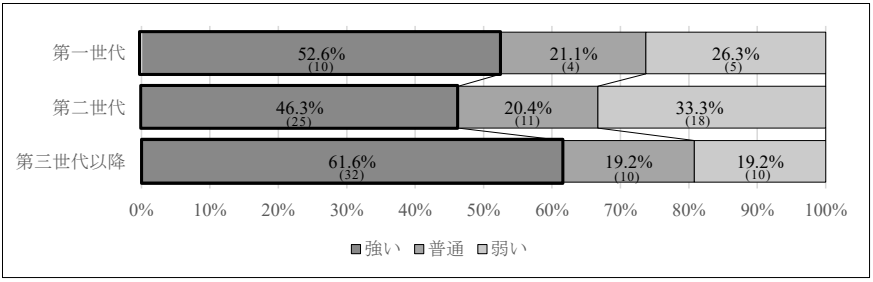
14) Meine Verbundenheit mit der Türkei ist hoch.
（トルコとの結びつきは強い。）

15) Für mich ist es wichtig, als türkisch gesehen zu werden.
（トルコ人として見られることは、重要である。）

16) Die Türkei ist für mich meine Heimat.
（トルコは自分にとって、故郷である。）

分析方法は 4.1.1 と同様に、質問 11) から 16) の回答の平均値を算出し、「トルコ人としてのアイデンティティ」が「強い」、「並み」、「弱い」の 3 段階で算出をしたところ、次のグラフ 10 のような結果になった。

グラフ 10: 世代別に見た「トルコ人としてのアイデンティティ」の強さ



ここでも同様に、左端の「トルコ人としてのアイデンティティ」が強いと感じている人の、世代別の割合に注目したい。第一世代は、53%弱が「トルコ人としてのアイデンティティ」が強いと回答している。第二世代では「トルコ人としてのアイデンティティ」を強く感じている回答者の割合が 46%程度に減少しているが、第三世代以降でふたたび、62%弱まで増加している。

以上により、「ドイツ人としてのアイデンティティ」の強さと「トルコ人としてのアイデンティティ」の強さを比較した際に、全世代を通して、「トルコ人としてのアイデンティティ」の方が、「ドイツ人としてのアイデンティティ」よりも強いことが明らかとなった。

4.2　アイデンティティと言語運用能力の関係

ここでさらに、もうひとつの疑問が浮かぶ。ドイツ語運用能力が高いと自己評価している回答者ほど、「トルコ人としてのアイデンティティ」が弱くなっていると言えるのかどうかという点である。そこで本節では、ドイツ語運用能力の高さ・低さと、トルコ人としてのアイデンティティの強さ・弱さとの関係を探っていきたい。

次の表 2 は、第二世代以降（計 116 名）の、書くときのドイツ語運用能力の自己評価と、「トルコ人としてのアイデンティティ」の関係を示したものである。

まず縦軸は、書くときのドイツ語運用能力を、上から順に「とても上手い」、「上手い」、「並み」、「下手」と自己評価したグループを示している。続いて横軸が、「トルコ人としてのアイデンティティ」を、左から順に「強い」、「並み」、「弱い」と感じているグループである。

表 2: 第二世代以降におけるドイツ語運用能力（書くとき）の自己評価と「トルコ人としてのアイデンティティ」の関係

		トルコ人としてのアイデンティティ		
		「強い」	「並み」	「弱い」
書くときのドイツ語運用能力	「とても上手い」と答えたグループ	**56.6%**（**30**）	17.0%（9）	26.4%（14）
	「上手い」と答えたグループ	**55.8%**（**24**）	18.6%（8）	25.6%（11）
	「並み」と答えたグループ	33.3%（2）	33.3%（2）	33.3%（2）
	「下手」と答えたグループ	33.3%（1）	33.3%（1）	33.3%（1）

カッコ内の実数を見ると明らかであるが、第二世代以降は、書くときのドイツ語運用能力を「とても上手い」、あるいは「上手い」と自己評価した人がほとんどであった。しかし、書くときのドイツ語運用能力を高く自己評価しているからといって、「トルコ人としてのアイデンティティ」が弱くなるというわけではないことが、表 2 から見て取れる [14)]。

続く表 3 は、第二世代以降の、話すときのドイツ語運用能力の自己評価と、「トルコ人としてのアイデンティティ」の関係を表したものである。表 2 と同様に、第二世代以降は、話すときのドイツ語も「とても上手い」あるいは「上手い」と自己評価した回答者がほとんどであった。ここでも、話すときのドイツ語運用能

14) 表 2 のようなクロス表における関連性を調べたい場合、クラメールの連関係数を使用することができる。表 2 をクラメールの連関係数で見たところ、0.077040668 という結果になった。クラメールの連関係数は 0 から 1 の値をとり、0 に近いほど関連が弱く、1 に近いほど関連が強いと解釈される。高橋（2005: 66）では、クラメールの連関係数の値が 0.25 未満の場合は「非常に弱く関連している」とし、0.25 から 0.5 までの場合は「やや弱く関連している」、0.5 から 0.8 までの場合は「やや強く関連している」、0.8 から 1.0 までの場合は「非常に強く関連している」という目安を設けている。したがって表 2 に示した調査結果に関しては、「トルコ人としてのアイデンティティ」の強弱と、書くときのドイツ語運用能力のあいだの関連が「非常に弱い」ことが分かる。

力を高く自己評価していても、「トルコ人としてのアイデンティティ」が弱くなるわけではない。「トルコ人としてのアイデンティティ」を強く保持している回答者が、半数を占めている[15)]。

表 3: 第二世代以降におけるドイツ語運用能力（話すとき）の自己評価と「トルコ人としてのアイデンティティ」の関係

		トルコ人としてのアイデンティティ		
		「強い」	「並み」	「弱い」
話すときのドイツ語運用能力	「とても上手い」と答えたグループ	**58.1%** （**36**）	14.5% （9）	27.4% （17）
	「上手い」と答えたグループ	**44.4%** （**16**）	27.8% （10）	27.8% （10）
	「並み」と答えたグループ	50.0% （3）	33.3% （2）	16.7% （1）
	「下手」と答えたグループ	100.0% （1）	0.0% （0）	0.0% （0）

表 2 および表 3 から、ドイツ語運用能力を高く自己評価していても、むしろ「トルコ人としてのアイデンティティ」は失われていないどころか、強いままだということが分かってきた。

4.3　国籍とアイデンティティの関係

では、ドイツ国籍を取得している回答者の場合は、「トルコ人としてのアイデンティティ」が弱くなっているのではないかという疑問がさらに浮かぶ。すでに注 4 でも指摘したとおり、Polat（1998）による調査が行われた時点では、ドイツ国内で二重国籍が正式に認められていなかったので、アイデンティティに関して Polat（1998）が示した調査結果は、現在の状況を反映しているとは言いがたい。それゆえ、筆者はアンケート調査の項目に国籍に関する項目を加え、ドイツ国籍を取得している回答者を絞り込めるようにした。

ドイツ国籍を取得したアンケート回答者（計 52 名）と、「トルコ人としてのア

15) 表 3 を表 2 と同様にクラメールの連関係数で見たところ、0.11383854 という数値になった。このことから、「トルコ人としてのアイデンティティ」と書くときのドイツ語運用能力の関連についても、弱いということができる。

イデンティティ」の関係を示したのが、表 4 である。

表 4: ドイツ国籍取得者と「トルコ人としてのアイデンティティ」の強さの関係

	トルコ人としてのアイデンティティ		
	強い	並み	弱い
ドイツ国籍所有者 （52）	41.2% （21）	19.6% （10）	39.2% （20）

ドイツ国籍を取得した回答者のなかに、「トルコ人としてのアイデンティティ」を弱いと感じている人が、40%近く確認できた。しかし、ドイツ国籍を所有しているのにもかかわらず、「トルコ人としてのアイデンティティ」が強いと感じている人もほぼ同数でおよそ 40%存在し、拮抗している。したがって、ドイツ国籍を取得していてもなお、「トルコ人としてのアイデンティティ」を強く感じている回答者の数は、予想される以上にのぼることが分かった。

4.4　トルコ人としてのアイデンティティとは

今回のアンケートの回答者たちにとって、「トルコ人としてのアイデンティティ」の内実はそもそも、いかなるものなのであろうか。「トルコ人としてのアイデンティティ」と強く結びついている要素は、なにであるのだろうか。本調査では、そのような要素として「性別」、「世代」、「出生地」、「最終学歴」、「職業」、「信心深さ[16]」、「日常生活におけるトルコ系移民の友人・知人・同僚との接触頻度」、「日常生活におけるドイツ人の友人・知人・同僚との接触頻度」、「外国人嫌悪の経験頻度」の 9 項目を設定した[17]。アンケートでは 9 項目を、次の質問 17) から

16) アンケートでは、どの宗派を信仰しているのかについても質問をしている。回答者のなかで最も多かったのがイスラム教のスンナ派（スンニ派）で 94 名おり、続いてイスラム教のアレヴィー派が 20 名、宗派は書かずにイスラム教徒とのみ回答した人物が 15 名いた。

17) Sackmann/Prümm/Schultz (2001) は、トルコ系移民を対象としたインタビューの際に、どの要因がトルコ系移民を「トルコ人」たらしめるのか、「トルコ人」の定義を求めている。インタビュー対象者のなかで自らを「トルコ人」であると定義づけた人物（49 人中 21 人）のうち、5 人が „Verhalten“（振る舞い）と回答し、4 人がトルコを誇りに思うことやトルコ語を話すといった „Identifikation“（一体感）と回答、2 人がトルコの „Abstammung“（家系）であるとし、同じく 2 人がトルコ人同士の „Gruppenorientierung“（集団志向）と回答し、„Muslim“（ムスリム）であることと回答した人はいなかった（Sackmann/Prümm/Schultz 2001: 24 を参照）。

25) の形式で問いかけた。

17) Geschlecht（性別）

☐ weiblich（女性）, ☐ männlich（男性）

18) Wer wanderte ZUERST nach Deutschland ein: Eine/r der

（誰が一番初めにドイツへ移住しましたか）

☐ Urgroßeltern（曾祖父母）, ☐ Großeltern（祖父母）, ☐ Eltern（両親）,

☐ Sie（あなた）

19) Geburtsort（出生地）

☐ Türkei（トルコ）, ☐ Deutschland（ドイツ）,

☐ Sonstiges Land（その他の国）（　　）

20) Was ist Ihr höchster absolvierter Schulabschluss（あなたの最終学歴は何ですか）

☐ kein Abschluss（卒業資格なし）, ☐ Grund-/ Hauptschulabschluss（小学校 / 基幹学校卒業）, ☐ Realschule (Mittlere Reife)（実科学校（中等教育修了資格））, ☐ Gymnasium (Abitur)（ギムナジウム（アビトゥア資格））, ☐ Abgeschlossene Ausbildung（職業訓練修了）, ☐ Fachhochschulabschluss（専門大学卒業）, ☐ Hochschule (Diplom)（大学（学部））, ☐ Hochschule (Magister)（大学（修士））, ☐ Hochschule (Promotion)（大学（博士））

21) Beruf (Falls zutreffend)（職業（該当する場合））

☐ Schüler/in（生徒）, ☐ Student/in（学生）, ☐ Auszubildende/r（職業訓練生）, ☐ Angestellte/r（会社員）, ☐ Beamte/r（公務員）, ☐ Selbstständige/r（自営業）, ☐ Teilzeitarbeiter/in（パートタイム就業者）, ☐ Hausfrau/-mann（主婦 / 主夫）, ☐ Sonstiges（その他の職業）（　　）

22) Ich bezeichne mich selbst als religiös（私は自身を信心深いと思う）

☐ trifft zu（あてはまる）, ☐ trifft eher zu（どちらかというとあてはまる）,

☐ teils-teils（どちらとも言えない）, ☐ trifft eher nicht zu（どちらかというとあてはまらない , ☐ trifft nicht zu（あてはまらない）

23) Ich habe im Alltag Kontakte zu türkischstämmigen Freunden/ Bekannten/ Kollegen
（私は日常生活でトルコ系の友人 / 知人 / 同僚と接触がある）
☐ immer（いつも）, ☐ oft（頻繁に）, ☐ manchmal（ときどき）, ☐ selten（まれに）, ☐ nie（一度もない）

24) Ich habe im Alltag Kontakte zu deutschen Freunden/ Bekannten/ Kollegen
（私は日常生活でドイツ人の友人 / 知人 / 同僚と接触がある）
☐ immer（いつも）, ☐ oft（頻繁に）, ☐ manchmal（ときどき）, ☐ selten（まれに）, ☐ nie（一度もない）

25) Ich erlebe Ausländerfeindlichkeit（私は外国人嫌悪を体験している）
☐ immer（いつも）, ☐ oft（頻繁に）, ☐ manchmal（ときどき）, ☐ selten（まれに）, ☐ nie（一度もない）

分析に際して、4.1.2 でアイデンティティを測るために使用した質問項目「11) 自分は典型的なトルコ人だと思う」ことと、今挙げた 9 項目とのあいだにそれぞれどのぐらい強い結びつきがあるのかを、見ていく。自らを「典型的なトルコ人」であると捉えている回答者の意識を強く支えるのは、上述の 9 項目のうちどの要素なのであろうか[18)]。

18) アンケートではアイデンティティを測る質問に対して、リッカート尺度（回答者が「非常に同意できる」、「どちらかというと同意できる」、「どちらともいえない」、「どちらかというと同意できない」、「全く同意できない」の 5 択から、最も自らの考えに当てはまる項目を選択する）を採用した。この尺度から得られる結果を、統計学の用語では順序尺度と言う。またアイデンティティとの相関性を測る 9 項目についても、アンケート内では順序尺度の質問として設けている。スピアマンの順位相関係数の見方は第 3 章と同様で、p 値に有意差があった上で、ρ（ロー）の数値が 1.0 あるいは -1.0 に近づくほど、変数間の関係が強いことを意味している。そして ρ（ロー）が 0 のときは、2 つの変数に関係がないことを示している。さらに ρ（ロー）の数値が 0 から 1.0 のあいだの場合は、二つの比較対象のうち、ひとつが大きくなるにつれ、もうひとつも大きくなることをあらわしている（正の相関）。他方で ρ（ロー）の数値が -1.0 から 0 のあいだの場合は、二つの比較対象のうち、ひとつが大きくなるにつれ、もうひとつが

まず、自らを「典型的なトルコ人」であると意識している人は、自身を信心深いと捉えていることが分かった[19]。続いて、自らを「典型的なトルコ人」であると捉えている回答者は、日常生活において、「トルコ系移民の友人・知人・同僚との接触頻度」が高いことが分かった[20]。そして、「典型的なトルコ人」と感じている回答者は、日常生活において他者から、外国人だとして「嫌悪」される経験が多いということも分かった[21]。これらのことから、自らを「典型的なトルコ人」であると捉える際に、イスラム教（スンナ派・アレヴィー派）を深く信仰していることが大きな役割を担っていると解釈できる。さらにまた、日常生活において、よりトルコ系移民の友人・知人・同僚と接触していること、そして日常生活において外国人であるとして差別される頻度が高いことも、回答者が「典型的なトルコ人」であると意識する要因の一つを構成していると考えられる。

5. 結論

アイデンティティは固定的ではなく、変動するものであろう。一個人が、居住地、交友関係、就学・就労状況、経済状況など、その時々に置かれている状況に応じて、自らのアイデンティティは変わってくる。本論文の調査結果では、トルコ系移民は、第二世代、第三世代以降と世代が移るにつれて、ドイツ語運用能力に関する

小さくなることを意味している（負の相関）。筆者のアンケートに置き換えるならば、ρ（ロー）が 0 から 1.0 ということは、回答者が「11) 自分は典型的なトルコ人だと思う」で「非常に同意できる」、「どちらかというと同意できる」を選択した場合に、比較対象の例えば「23) 私は日常生活でトルコ系の友人 / 知人 / 同僚と接触がある」でも、「いつも」、「頻繁」と回答していることを意味している。逆にρ（ロー）が -1.0 から 0 の場合は、回答者が「11) 自分は典型的なトルコ人だと思う」で「非常に同意できる」、「どちらかというと同意できる」と選択した場合に、「23) 私は日常生活でトルコ系の友人 / 知人 / 同僚と接触がある」では、「まれに」、「一度もない」を選択しているということをあらわしている。

19) 「11) 自分は典型的なトルコ人だと思う」と「22) 私は自身が信心深いと思う」をスピアマンの順位相関係数で計算したところ、まず p 値が $2.722e^{-06}$ となり、有意差が確認できた。さらにρ（ロー）は 0.4054655 となり、回答者が自身を「典型的なトルコ人」と感じているほど、「信心深い」と回答していることが統計学的に裏付けできる。

20) まずは p 値が 0.0003237 となり、有意差が確認できた。またρ（ロー）も 0.3189467 となり、すなわち回答者が、「典型的なトルコ人」と感じているほど、「日常生活におけるトルコ系移民の友人・知人・同僚との接触頻度」が多いと回答していることが明らかとなった。

21) まず p 値が 0.04121 となり、有意差が確認できた。さらにρ（ロー）が 0.1836241 となり、ここでも回答者が「典型的なトルコ人」と感じているほど、他者から外国人として嫌悪された経験が多いことが示された。

自己評価を高め、ドイツ語をより多く使用することが分かった。しかしその一方で、アンケート回答者は世代を超えて、トルコ人としてのアイデンティティを強固に持ち続けていることも判明した。それはドイツ国籍を取得したトルコ系移民に関しても、同様であった。またさらに、イスラム教の信仰心が強く、日常生活でトルコ系移民の友人や知人、同僚との接触頻度が高く、そして差別経験が多い回答者ほど､自らを「典型的なトルコ人」であると捉える傾向にあることが分かった。

以上のように本論文では、トルコ系移民の言語意識とアイデンティティについて考察してきた。ドイツを含めた EU 諸国では現在、移民や難民、外国人に対する風当たりが強くなっている。ドイツでは難民の国内受け入れが盛んになり始めた 2014 年頃から「西洋のイスラム化に反対する欧州愛国者（略称：ペギーダ)」と称するグループのデモ行動が始まり、また 2017 年の連邦議会選においては、イスラム教の移民や難民に反対する立場を明確に採る政党「ドイツのための選択肢」がドイツ連邦議会で第 3 党に躍進した。こうした動きにより、ドイツ国内のトルコ系移民のアイデンティティがこの数年のあいだに大きく変わってきていることは想像に難くない。現在の EU 諸国におけるこうした状況が、ドイツ社会から距離を置いて、トルコ系であることを意識せざるを得ない状況へとトルコ系移民を多かれ少なかれ追い込んでいると考えられる。2017 年 12 月から 2018 年 3 月にかけて行ったアンケート調査に基づく本論文の調査結果は、望むらくは、このような意識の変化のいくつかの局面を反映しているであろう。

参考資料

Statistisches Bundesamt (2012): *Bildung und Kultur: Allgemeinbildende Schulen: Schuljahr 2011/2012*. Wiesbaden: Statistisches Bundesamt.

Statistisches Bundesamt (2013): *Bildung und Kultur: Allgemeinbildende Schulen: Schuljahr 2012/2013*. Wiesbaden: Statistisches Bundesamt.

Statistisches Bundesamt (2014): *Bildung und Kultur: Allgemeinbildende Schulen: Schuljahr 2013/2014*. Wiesbaden: Statistisches Bundesamt.

Statistisches Bundesamt (2015): *Bildung und Kultur: Allgemeinbildende Schulen: Schuljahr 2014/2015*. Wiesbaden: Statistisches Bundesamt.

Statistisches Bundesamt (2016): *Bildung und Kultur: Allgemeinbildende Schulen: Schuljahr 2015/2016.* Wiesbaden: Statistisches Bundesamt.

Statistisches Bundesamt (2017a): *Bildung und Kultur: Allgemeinbildende Schulen: Schuljahr 2016/2017.* Wiesbaden: Statistisches Bundesamt.

Statistisches Bundesamt (2017b): *Bevölkerung und Erwerbstätigkeit: Ausländische Bevölkerung: Ergebnisse des Ausländerzentralregisters.* Wiesbaden: Statistisches Bundesamt.

Statistisches Bundesamt (2017c): *Bevölkerung und Erwerbstätigkeit: Bevölkerung mit Migrationshintergrund: Ergebnisse des Mikrozensus 2016.* Wiesbaden: Statistisches Bundesamt.

参考文献

Androutsopoulos, Jannis (2001): „Ultra korregd Alder!“ Zur medialen Stilisierung und Popularisierung von ‚Türkendeutsch’. In: *Deutsche Sprache 4/2001*, S. 321-339.

Deminger, Szilvia (2004): *Spracherhalt und Sprachverlust in einer Sprachinselsituation. Sprache und Identität bei der deutschen Minderheit in Ungarn.* Frankfurt am Main/ Berlin/ Bern/ Bruxelles/ New York/ Oxford/ Wien: Peter Lang.

Dirim, İnci/ Auer, Peter (2004): *Türkisch sprechen nicht nur die Türken. Über die Unschärfebeziehung zwischen Sprache und Ethnie in Deutschland.* Berlin/ New York: de Gruyter.

林徹（2001）「トルコ語ドイツ語二言語使用の少年少女たちが『夢の中で話す言語』」〔『東京大学言語学論集』第 20 号、347-364 頁〕.

林徹（2003）「ふたつの祖国」〔『月刊言語』32（6）、大修館書店、36-42 頁〕.

林徹（2008a）「ベルリンのトルコ語」〔『月刊言語』37（4）、大修館書店、98-103 頁〕.

林徹（2008b）「交差することば、葛藤する人々」GCOE セミナー『コンフリクトの人文学』（2008 年 3 月 8 日開催）の配布資料 .

林徹（2018）「トルコ語・ドイツ語二言語使用者の生徒たちの言語選択と言語意識ーベルリン・クロイツベルクの学校でのアンケート調査に見られる変化」〔『東京大学言語学論集』別冊 2、79-92 頁〕.

Polat, Ülger (1998): *Soziale und kulturelle Identität türkischer Migranten der zweiten*

Generation in Deutschland. Hamburg: Kovač.

Rjabtschuk, Mykola (2009): Ambivalentes Grenzland: Die ukrainische Identität zwischen Ost und West. In: Meyer, Thomas/ Eisenberg, Johanna (Hg.): *Europäische Identität als Projekt. Innen- und Außensichten.* Wiesbaden: VS Verlag.

Sackmann, Rosemarie/ Prümm, Kathrin/ Schultz, Tanjev (2001): *Kollektive Identität türkischer Migranten in Deutschland? Erste Annährung an eine Forschungsfrage.* Bremen: Institut für Interkulturelle und Internationale Studien.

Schmidt-Denter, Ulrich (2011): *Die Deutschen und ihre Migranten. Ergebnisse der europäischen Identitätsstudie.* Weinheim/ Basel: Beltz Juventa.

高橋信（2005）『Excel で学ぶコレスポンデンス分析』オーム社 .

田中翔太（2015）「現代ドイツにおけるトルコ系移民の言語意識－若者の声を聞いてみて」〔『学習院大学ドイツ文学会研究論集』第 19 号、163-198 頁〕.

（たなか・しょうた：　ドレスデン工科大学博士候補生）

Sprachbewusstsein und Identität bei türkeistämmigen Migranten Ergebnisse einer Umfrage in 18 Städten Deutschlands

Shota Tanaka

Heute leben zahlreiche Menschen mit Migrationshintergrund in Deutschland. Menschen mit türkischem Migrationshintergrund (sowohl mit türkischer als auch deutscher Staatsangehörigkeit) bilden hierbei die größte Gruppe. Das Bildungsniveau der Türkeistämmigen wurde von der deutschen Gesellschaft immer wieder als problematisch angesehen und deren Deutsch oft als „gebrochen“ bezeichnet. Jedoch steigt das Bildungsniveau der Türkeistämmigen, v. a. der zweiten und dritten Generation, allmählich an.

Umfragen bezüglich des Sprachbewusstseins und/oder der Identität mit Türkeistämmigen führten bisher nur wenige Forscher durch, darunter Ülger Polat (1998) und Toru Hayashi (2001, 2003, 2008a, 2008b, 2018), jedoch jeweils nur in einer Stadt und nur unter jeweils einer einzigen Generation. In dieser Hinsicht ist die vorliegende Umfrage, die in mehreren Städten über mehrere Generationen durchgeführt wurde, anders als bisherige Studien. Die vorliegende Umfrage umfasst außerdem ausführliche Fragen bezüglich des Sprachbewusstseins und der Identität. Das Ziel dieser Forschung ist es, anhand der Ergebnisse der Umfrage, die Identität der Türkeistämmigen in der Gegenwart zu untersuchen. Es ist zu vermuten, dass Identität und Sprache im engen Verhältnis stehen. Deshalb wird zuerst aufgezeigt, wie Probanden ihre deutsche Sprachkompetenz beim Sprechen und Schreiben selbst einschätzen und welche Sprache sie innerhalb ihrer Familie verwenden. Aufgrund der Ergebnisse wird der Zusammenhang zwischen Sprachbewusstsein und Identität untersucht.

Die Umfrage wurde vom 01.12.2017 bis zum 30.03.2018 in verschiedenen türkischen Organisationen, Verbänden, Vereinen oder Moscheen, in 18 Städten durchgeführt.

Insgesamt waren es 144 Personen (davon gültige Antwort: 135) von der ersten bis zur vierten Generation (19 aus der ersten Generation, 57 aus der zweiten, 52 aus der dritten, 7 aus der vierten und 9 Personen, bei denen die Generation unklar war); davon waren 70 weiblich und 74 männlich. Der Fragebogen stand sowohl auf Deutsch als auch auf Türkisch zur Verfügung und Teilnehmer konnten einen der beiden Fragebögen auswählen. Der Fragebogen besteht aus 10 Seiten und 139 Fragen zu Selbsteinschätzung der Sprachkompetenz, Situationen des Sprachgebrauchs und Identität. Da aus der vierten Generation nur 7 Fragebögen vorliegen, werden sie in der Auswertung mit der dritten Generation als „dritte und vierte Generation“ zusammengefasst.

Bei der Selbsteinschätzung der deutschen Sprachkompetenz beim Sprechen und Schreiben stellte es sich heraus, dass es einen signifikanten Unterschied zwischen den Generationen gibt. Die Zahl der Probanden, die ihre deutsche Sprachkompetenz beim Sprechen und Schreiben als „gut“ oder „sehr gut“ einschätzen, steigt in der zweiten Generation deutlich. Die hohe Selbsteinschätzung bleibt ebenfalls in der dritten und vierten Generation bestehen. Bezüglich des Sprachgebrauchs innerhalb der Familie war ebenfalls ein signifikanter Unterschied zwischen Generationen zu beobachten. Je jünger die Generation wird, desto häufiger verwenden Probanden Deutsch mit ihren Familienmitgliedern, u. a. mit ihren Geschwistern, Großeltern, Eltern oder Kindern. Die zweite, dritte und vierte Generation der Türkeistämmigen schätzt demnach ihre deutsche Sprachkompetenz insgesamt höher ein und verwendet im Alltag immer häufiger Deutsch.

Die Identität der Probanden wurde mittels insgesamt zwölf Fragen aus dem Fragebogen gemessen. Hierbei sollte untersucht werden, ob jüngere Generationen mehr Distanz zur Türkei besitzen, als die älteren. Bezüglich der Affinität zu Deutschland gab es in jeder Generation jeweils nur knapp 20 %, die ihre deutsche Identität als „stark“ wahrnehmen. Hingegen nahmen über 40 % der Probanden in allen Generationen die türkische Identität als „stark“ wahr. Gleichermaßen zeigt es sich, dass die türkische Identität in allen Generationen stärker ist als die deutsche. Es stellt sich zudem die Frage, ob möglicherweise ein negativer Zusammenhang zwischen deutscher Sprachkompetenz und der Stärke der türkischen Identität besteht. Über 40 % der Probanden der zweiten, dritten und vierten Generation besitzen eine starke türkische Identität, schätzen jedoch ihre deutsche Sprachkompetenz

ebenfalls als „gut“ oder „sehr gut“ ein. Auch wenn die Probanden ihre deutsche Sprachkompetenz hoch einschätzen, heißt das demnach nicht, dass die türkische Identität schwächer wird. Hierdurch kommen wir auf die Frage: Haben die Türkeistämmigen mit deutscher Staatsangehörigkeit eventuell eine schwächere türkische Identität? Hier ist der Zusammenhang zwischen der deutschen Staatsangehörigkeit und der türkischen Identität zu untersuchen. Es gab tatsächlich knapp 40 %, die ihre türkische Identität als „schwach“ wahrnehmen. Jedoch, auch wenn sie die deutsche Staatsangehörigkeit besitzen, nahmen ca. 41 % ihre türkische Identität als „stark“ wahr.

Letztlich ist zu untersuchen, welche Faktoren stark mit der „türkischen Identität“ verbunden sind. Verglichen mit 9 Faktoren (Geschlecht, Generation, Geburtsort, höchster Schulabschluss, Beruf, Religiösität, alltäglicher Kontakt mit türkeistämmigen Freunden, Bekannten oder Kollegen, alltäglicher Kontakt mit deutschen Freunden, Bekannten oder Kollegen und ausländerfeindliche Erfahrungen im Alltag), die die türkische Identität der Probanden konstruieren können, stellte sich heraus, dass Probanden, die sich selbst als „ein typischer Türke/ein typische Türkin“ bezeichnet, sich für religiös (hauptsächlich sunnitisch oder alevistisch) halten, im Alltag „oft“ bis „immer“ Kontakt mit türkeistämmigen Freunden, Bekannten oder Kollegen haben und im Alltag „oft“ bis „immer“ Ausländerfeindlichkeit erleben.

Zusammengefasst zeigen die Ergebnisse, dass sich die Türkeistämmigen trotz zunehmender selbsteingeschätzter deutscher Sprachkompetenz eine starke türkische Identität bewahren und dies sogar bis in die vierte Generation. Hierbei ist zu bedenken, dass Identität kein vollkommen stabiles Konstrukt ist, sondern sich z. B. durch den Wohnort, den Umgang mit Mitmenschen, Schule, Arbeit oder aus ökonomischem Grund fortlaufend ändern kann. Ursache für den vorliegenden Befund könnte insbesondere die derzeitige politische Situation sein. In EU-Ländern wie Deutschland veränderte sich die Umgebung um Migranten, Flüchtlingen oder Ausländer in den letzten Jahren durch rechte Bewegungen stark. Deshalb ist zu vermuten, dass dies auch die Identität der Türkeistämmigen beeinflusst.